

高度技能に基づいた伝統工芸サブブランドに関する試験・研究開発(第1報)

－ 津軽塗のサブブランド商品開発 －

Study on sub-brand development based on the traditional craftsmanship (1st report)

－ Sub-brand development for Tsugaru lacquerware products －

鳴海 藍、小松 勇、濱田 圭、赤田 朝子

「津軽塗」は、昭和 50 年に伝統的工芸品、平成 29 年に重要無形文化財(保持団体:津軽塗技術保存会)に指定された青森県唯一の伝統工芸品である。近年、SDGs の観点から天然素材である漆が注目を集め、令和 5 年には津軽塗を題材とした映画「バカ塗りの娘」が公開されるなど、若年層への認知拡大の動きが見られる。一方で、デザイン性に優れた合成漆器の普及により、食器を主戦場とする津軽塗商品は高価格で日常使いにくく、若年層が手に取りにくいという現状がある。そこで本研究では、「津軽塗」をメインブランドとし、若年層でも手が届く価格帯の「津軽塗サブブランド」の構築を目指す。

現在までに伝統的工芸品産業指定に登録されている漆器は 23 品目あり、その産地の半数以上は合成漆器を扱っている。これまでの合成漆器は多品種大量生産で低品質のものが多かったが、最近では意匠に力を入れたり、塗装方法を工夫するなど、デザイン性に優れた高品質なものも散見される。青森県においても過去に漆の代替塗料の研究が行われたが、産地として「津軽塗」は代替塗料に頼らず漆を用いてきた。本研究における「津軽塗サブブランド」では、この「漆の使用」を産地のアイデンティティとして捉え、漆を用いつつ、津軽塗よりも低コストで、且つ若年層に受け入れられるようなデザインの商品開発を行うこととした。

(1) 津軽塗サブブランドテーマ:「工程を表現として捉える」(第2報、第4報)

「津軽塗デザイン開発のための手板制作」(青森県工業試験場、S61、小林)の考え方をベースとし、津軽塗の加飾工程の一つ一つを「独立した表現方法」として捉えることとした。また、加飾工程で肝となる凸模様を付ける「仕掛け」については、デザイン部の持つ技術(三次元曲面転写、シルクスクリーン)を活用し、絵模様を取り入れたデザインも行う。

(2) 動作分析による高度技術の可視化と評価(第3報)

津軽塗は漆を塗り重ねる「髹漆技法」の中の「研ぎ出し変り塗」という技法を用いて作られている。本研究では、津軽塗を象徴する最もオーソドックスな「唐塗」と高度な技術を要する「ななこ塗」について、熟練度の異なる被験者の作業動作を観察し、商品開発に必要な技術の可視化と言語化を行う。また、その仕上がりについては、数値計測とアンケートを実施する。仕掛けの山高さ、表面の顕微鏡観察、官能評価(SD 法)のデータを取得して、サブブランド製品仕様書作成の基礎とする。また、技術の高さを裏付ける評価の参考値として、最終工程(研ぎ出し面)の表面粗さ、光沢度を取得する。



図 津軽塗サブブランド開発の体系図